

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 19 日現在

機関番号：12101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24720171

研究課題名(和文) マルチモーダル会話分析による同意・非同意の強弱の可視化プロセスの記述に向けて

研究課題名(英文) Toward descriptions of the visible processes of various strengthes of agreement and disagreement from the perspective of multi-modal conversation analysis

研究代表者

杉浦 秀行 (Sugiura, Hideyuki)

茨城大学・留学生センター・准教授

研究者番号：70619626

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、言語的・非言語的要素を射程に入れたマルチモーダル会話分析を採用し、日本語会話における相手の評価や意見に対する同意と非同意の強弱について、言語的要素と非言語的要素の同時利用の構築プロセスに着目し、同意・非同意の強弱の可視化がどのように実現しているかを明らかにすることを試みた。その結果、指差しを用いた同意が強い同意の指標になることや、同意と非同意の間で対照的な視線の振る舞いがあることなど、先行研究には見られない興味深い発見があった。

研究成果の概要(英文)：Employing multimodal conversation analysis which covers the use of both linguistic and non-linguistic elements, this study focused on the process of delivering agreement and disagreement and attempted to reveal how different strengths of agreement can be made visible. Some of the interesting findings previously uncovered include the case in which a pointing gesture is an indicator of strong agreement, and a difference in gaze behavior between agreement and disagreement.

研究分野：会話分析

キーワード：マルチモーダル分析 同意 非同意 ジェスチャー 視線 会話分析 日本語

1. 研究開始当初の背景

本研究の方法論として採用する会話分析の先行研究では、会話参加者が産出する相手の評価・意見に対する同意・非同意の強弱には、いくつかの特性が係わっていることが報告されている (Mori, 1999; Ogden, 2006; Pomerantz, 1984). 例えば、相手の評価・意見への強い同意を達成するために、以下のようなプラクティスが利用されていると報告されている。

相手の利用した評価形容詞 (例: cute 「かわいい」) に対して、それを格上げた評価形容詞 (例: adorable 「魅力的」) を利用する (Pomerantz, 1984; Ogden, 2006; Mori 1999)

相手の利用した評価形容詞 (例: fun 「楽しい」) に強意副詞 (例: great 「すごく」) を付加する (例: great fun 「すごく楽しい」) (Pomerantz, 1984; Ogden, 2006; Mori 1999)

相手のターン (相手の評価・意見) に重ねて、同意ターンを産出する (Pomerantz, 1984; Mori, 1999)

特定のターン・フォーマットを利用する (一つのターンの中で同意とその正当化を続けて産出する) (Mori, 1999)

先行研究では、上記のように、同意の強弱には、いくつかの個別の特性、とりわけ言語的要素が大きく係わっていることが明らかにされているが、これらの特性を包括的な枠組みの下で、それぞれどのように係わり合っているか、または係わり合っていないかについて踏み込んだ分析がなされていない。さらに、先行研究では言語的要素 (厳密には、言語形式に係わる要素) についての詳細な記述を提供しているものの、会話参加者が現実の相互行為の中で利用する音の引き伸ばしや声量などの音声要素、さらには視線、表情、身体動作などの非言語的要素を射程に入れた包括的な枠組みでの記述がなされていない。現実の会話が、複数の言語的・非言語的要素の同時利用で進行しているという事実を鑑みるならば、言語的・非言語的要素の同時利用を射程に入れた包括的な枠組みの下で、同意・非同意の強弱がどのように可視化されているかを明らかにすることで、より適切かつ正確な記述が可能となると言える。

言語的・非言語的要素の同時利用を射程に入れた包括的な枠組みで分析を行う上で最も参考になるのが C. Goodwin と M. Goodwin の評価活動に係わる研究である。彼らの研究は、同意・不同意の強弱に焦点を置いたものではないが、言語的・非言語的要素を射程に入れた包括的な枠組みで分析するうえで示唆に富んでいる。彼らは、評価という行為は言語形

式、音声、身体動作、表情等その瞬間に利用可能なあらゆる資源を総動員して達成される行為であることを明確に示した (Goodwin & Goodwin, 1987, 1992)。彼らの功績は、通常分析対象として切り離されて分析される相互行為上の様々な言語的・非言語的要素を、評価行為という単一の行為のなかに組み込まれる構成要素として、その全てを射程に収めた分析的枠組みを提示し、それら構成要素の統一体としての評価行為のプロセスを過不足なく記述していることである。

C. Goodwin と M. Goodwin の分析手法に習い、杉浦 (2011) では、会話参加者の同意・非同意の強弱の可視化のプロセスを明らかにする足掛かりとして、「強い同意」に焦点を当て、言語的・非言語的要素を射程に入れたマルチモーダル分析を行った。この研究では、同意の強さを直前の話者の評価・意見に対する係わり合いの強さで規定していくことを試みた。その結果、以下の2つのプラクティスを通じて「強い同意」が実現されていることが明らかになった。

比較的長い同意ターンを構築するなかで、言語的要素 (特に音声要素) と表情・身体動作を呼応させながら、ターン終結部をクライマックスとして徐々に係わり合いの強さを強化する

言語形式上は「そう」というミニマムな単位の同意を産出する一方、複数の非言語的資源を最大限に利用することで係わり合いの強さを瞬時に強化する

とりわけ、注目すべきことは、上記の2つのプラクティスでは、先行研究で指摘されてこなかった表情や身体動作などの非言語的要素を言語的要素に巧みに呼応させて産出することで「強い同意」を可視化していることである。しかしながら、これら2つのプラクティスは「強い同意」を可視化するためのプラクティスの一部にしかすぎず、他にも明らかになっていないプラクティスが多数存在すると推察される。

2. 研究の目的

本研究は、杉浦 (2013) の研究を足掛かりに、言語的・非言語的要素を射程に入れたマルチモーダル分析を通じて、相手の評価や意見に対する **同意・非同意を構成するターンの構築プロセスに注目し、日本語話者が言語的要素と非言語的要素をどのように呼応させながら、同意・非同意の強弱を調整し、それを相手にとって認識可能なものとしているかを明らかにしていくことを目的とした。具体的に以下のことを明らかにしていくことを目的とした。**

日本語話者が産出する言語的要素と非言語要素の同時利用に着目し、直前の話者の評価に対する(非)同意の強弱がどのように可視化されていくか。

同意・非同意ターンの構築プロセス中で、言語的要素と非言語的要素がどのように相互に(あるいは、個別に)貢献しているか。

及びの結果から、同意と非同意の強弱を可視化していくプロセスの違いと、それらの行為のプロセスに係わる言語的要素と非言語的要素の貢献度の違い。

3. 研究の方法

本研究の基盤となっているのは、社会学者の Harvey Sacks たちが確立させた**会話分析 (Conversation Analysis)**の分析手法を採用した質的研究である。会話分析は、分析対象となる現象(発話によって達成される行為)を含んだ会話の断片のコレクションを作成し、詳細に分析することを通じて、そのなかに秩序立って現れるパターンを抽出し、記述していく研究手法である。

本研究では、会話分析研究において、近年 C. Goodwin や M. Goodwin が推し進めている**言語的要素と非言語的要素の両方を射程に入れたマルチモーダル会話分析**を採用する。このマルチモーダル会話分析では、会話の現場に存在する(あるいは生じうる)あらゆる要素・対象が相互行為の資源であると捉え、ビデオ録画によってアクセス可能な音声・映像データを詳細に観察することで、現実の会話の中で話者たちが産出する言語的要素・非言語的要素、さらには会話の現場に存在するモノ(例:空間、机、椅子、携帯電話、その他話者の所有物)が、話者たちの相互行為上の目的を達成するためにどのように利用されているかを適切かつ正確に記述することを可能にすると考えられている(C. Goodwin, 2000, 2003, 2007)。現実の会話が、複数の言語的・非言語的要素の同時利用で進行しているという事実を鑑みるならば、言語的要素のみを分析対象とする既存の多くの言語・談話研究の分析手法では分析に限界があるが、マルチモーダル会話分析は、言語的・非言語的要素を射程に入れた包括的な分析的枠組みを提供するという点で、本研究の焦点となる同意・非同意の強弱の可視化のプロセスを詳細に記述するのに最も適した分析手法である。

本研究では、ビデオ録画された会話の中から同意・非同意(そしてそれらの強弱のパリエーションごと)を含む会話の断片のコレクションを作成し、それらを強弱のタイプごとに分類し、そのタイプごとに言語的・非言語的要素の同時利用のパターンを見出し、同意・非同意の強弱の調整が、どのような構築プロセスを経て達成されているかを詳細に

記述していく。

4. 研究成果

本研究の結果、以下の興味深い発見があった。

- (1) 強い同意については、とりわけ同意話者が差し出す相手に向けた指さしとそれに付随する話者の姿勢、顔つきとが呼応することで、強い同意が公然化されていることが明らかとなった。同意する際に相手に向けた指さしが強い同意の指標となっていることは、これまでの会話分析的研究では指摘されておらず、注目すべき発見であった。
- (2) 強い同意のケースでは、通常は言語的要素と非言語的要素をシンクロさせることで、その強さを可視化するが、いくつかのケースでは、同意産出者は非言語的要素を併用せず、言語的要素(音声)を巧みに利用することで、「聞かせること」に志向した形で強い同意を実現していることがあった。また、それとは逆に、言語的要素では普通の同意と変わらないが、複数の非言語的要素を併用することで、「見せること」に志向した形で強い同意を実現しているケースも発見された。
- (3) 同意と非同意の産出に際する視線の振る舞いに着目したところ、同意のケースでは、同意産出者は、典型的に、直前の評価者のターンの開始部から一貫して視線をその評価者に向け、共視を確立し、その共視した視線を固定したまま同意ターンを産出することが観察された。これに対して、非同意のケースについては、非同意産出者は、典型的に、同意のケースと同様に、直前の評価ターンの開始部から視線を評価者に向け、共視を確立し、その共視した視線をしばらく固定するが、非同意ターンの開始部で視線を逸らし、再度、非同意ターン終結部近くで、評価者のほうへ視線を向けることが観察された。この点は、同意プラス非同意ターンの場合にも観察された。すなわち、非同意の前に前置きされる「そう」などを産出する際も、「そう」などのターン冒頭部を産出する時点で視線を逸らし、再度、同意プラス非同意ターン終結部近くで視線を評価者に向けることが観察された。このことから、同意プラス非同意ターンも含め、非同意のケースでは、非同意産出者が、非同意ターンの開始部で視線を逸らすという振る舞いが、構築中の行為を投射する資源となっ

ていることが示唆される。これらの観察から、同意と非同意という対照的な行為タイプでは異なる視線の振る舞いがなされており、ターン開始部における視線の振る舞いは、行為タイプに敏感なものであることが示唆された。

- (4) 同じ同意の中でも、同意産出者が現在進行中の評価活動にどのくらい従事しているかという程度の違いによって、ターン構築プロセスにおける視線の振る舞いの違いが観察された。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 1 件)

杉浦秀行、『「そう」によって表明される同意の強弱：マルチモーダル分析の試み』、茨城大学留学生センター紀要、11巻、43-62、2013、査読有
<http://ir.lib.ibaraki.ac.jp/bitstream/10109/4643/1/201300094.pdf>

[学会発表](計 10 件)

杉浦秀行、『マルチモダリティーを視野に入れた同意の強さの記述への挑戦』、第 36 回社会言語科学会研究大会、2015.9.5、京都教育大学(京都府・伏見区)

Hideyuki Sugiura、『Gaze behavior in Japanese everyday conversation: A case of agreement』、The 14th International Pragmatics Conference、2015.7.31、University of Antwerp (Antwerp・Belgium)

杉浦秀行、『視線の振る舞いと対照的な行為タイプの関係性：同意・非同意ターンに着目して』、第 33 回社会言語科学会研究大会、2014.9.13、立命館アジア太平洋大学(大分県・別府市)

Hideyuki Sugiura、『Displaying strong agreement in Japanese conversation: A multimodal analysis』、The Fourth International Conference on Conversation Analysis、2014.6.27、UCLA (Los Angeles・United States)

杉浦秀行、『「でしよう」単独ターンによって表明される同意の強さ：マルチモーダル分析によるアプローチ』、第 14 回日本認知言語学会全国大会、2013.9.21、京都外国語大学(京都府・右京区)

Hideyuki Sugiura、『Agreeing with a pointing gesture in everyday Japanese conversation: A conversation analytic perspective of multimodal interaction』、The 13th International Pragmatics Conference、2013.9.12、India Habitat Centre (New Delhi・

India)

杉浦秀行、『同意の強弱の記述に向けて：会話分析的手法を用いたマルチモーダル分析の試み』、「言語と人間」研究会(HIC)5月例会、2013.5.25、立教大学(東京都・豊島区)

杉浦秀行、『相互行為の中の指差し：指差し行為の非指示性』、第 31 回社会言語科学会研究大会、2013.3.17、統計数理研究所・国立国語研究所(東京都・立川市)

Hideyuki Sugiura、『Indexing epistemic primacy: Agreeing with the stand-alone *deshoo* in Japanese conversation』、The 22nd Japanese/Korean Linguistics Conference、2012.10.13、National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL)(東京都・立川市)

杉浦秀行、『「でしよう」を用いた評価への応答：行為と「なわ張り」の接点』、第 30 回社会言語科学会研究大会、2012.9.2、東北大学(宮城県・仙台市)

[その他]

ホームページ等

<https://sites.google.com/site/hidesuguiraca/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉浦 秀行 (SUGIURA HIDEYUKI)
茨城大学・留学生センター・准教授
研究者番号：70619626

(2) 研究分担者

無し

(3) 連携研究者

無し

(4) 研究協力者

無し